

「エデンの東」 East of Eden

上映前

《作品》

- 1954年作品、1955年公開。WB作品。1時間58分。今から63年前、私が中2の時。

《監督》

- エリア・カザン：出て間もないシネマスコープの大画面で、原作のスケールの大きいドラマ性をスクリーンに再現。

《受賞》

- 第13回ゴールデングローブ賞作品賞(ドラマ部門)、第8回カンヌ国際映画祭劇映画賞を受賞。また、出演者ではジェイムズ・ディーンが初主演でアカデミー最優秀主演男優賞ノミネート。ジョー・ヴァン・フリートが第28回アカデミー賞でアカデミー助演女優賞を受賞した。

《原作》

- ジョン・スタインベックの原作(1952)は、19世紀後半から第一次世界大戦に至る時期のアメリカ合衆国カリフォルニア州サリナスを舞台に、創世記のカインとアベルの物語をモチーフとして、アイルランド移民であるサミュエル・ハミルトン家と、東部から来たアダム・トラスク家の2家族の歴史を描く大河ドラマ小説。本作品は、原作の後半(最終章)におけるキャルを軸にした、1917年のサリナスを舞台としている。

《脚本》

- ポール・オズボーン：心に残るセリフの数々と、ドラマチックな構成。

《タイトル「エデンの東」のいわれとあらすじ》

- 保安官サム最後の言葉。「カインは弟アベルを殺した」(創世記 4:8)「それで、カインは、主の前から去って、エデンの東、ノデの地に住みついた。」(創世記 4:16) お前も去れ。最初人間であるアダムとエバは、この楽園の管理を神から任されていたが、罪を犯してこの園を追われる。この2人から生まれた兄弟、カインとアベルは、神にささげ物をするが、なぜか神は弟アベルの

ささげ物を受け入れ、兄カインのものは拒まれる。怒った兄は、弟を野に誘い出して殺してしまう。これが殺人の事始め。かくしてカインは神のもとを更に遠くに追われ、「エデンの東」ノデの地に住み着くことになる。映画では、父が兄だけを溺愛し、自分が心血込めて作ったキャベツを売って得たお金も父に拒まれたことから、弟のキャルは復讐のため、“母は死んだ”と思っている兄に売春酒場のおかみとして生きている母を見せる。半狂乱になった兄は死の戦地に出征してしまう。父(神)に受け入れられずに弟アベルを殺してしまう兄カインの役どころを、映画では弟が演じている。彼はアロンの行方をアダムに問われた際に「知らないね、僕は兄さんの子守りじゃないんだ」と返している(創世記 4:6)。カインは神の予言どおり、地上をさまよわずらい人になり、ノデの地で神なき文明を築いていくことになるが、映画の方は、脳出血で死期の迫った父が、親に受け入れられない子の心の寂しさに初めて気づき、枕辺の弟息子を「今の私にはお前が一番役に立つ」と受け入れるところで終わっている。あの感動のラストシーンは、いみじくも聖書の告げる福音のメッセージそのもの。人間の罪のゆえに、ひとたびは閉じられたエデンの門(狭き門!)が、キリストの十字架の贖罪によって回復され、信じる者がやがて再び「いのちの木」を食べる権利を与えられ、門を通過して都にはいれるようになる(ヨハネの黙示録 22:14)究極の救いの日、神との和解の完成の日を望んでいる。愛なる神の存在する限り、“失樂園”の人間が、愛なき孤独と不毛の地「エデンの東」で一生を終わることはない。「エデンの東」に住む者よ。希望を持て!

《テーマ音楽》

- レナード・ローゼンマン(映画冒頭「序曲」で始まる)。文化放送「ユア・ヒットパレード」連続3年間首位(ヴィクター・ヤング楽団スロー・ストリングスと見事な編曲) 雪村いずみ♪「涙ぐんで独り歩いた 暗い夜のニレの森陰」(ラストシーンから)♪

《主なキャスト》

- ケイレブ(聖書のカレブ・キャル)・トラスク(ジェイムズ・ディーン) 主人公。アダムの子でアロンの双子の弟。アダムより聖書にちなんでケイレブと名付けられるが、劇中ではほとんど愛称のキャルと呼ばれている。粗暴でひねくれた性格で、父アダムから愛されず、父の愛に飢えている。
- アブラ(ジュリー・ハリス) : アロンの恋人で、キャルやアダムへも気配りを忘れない優しい娘。実はキャルの抱える悩みと同じ思いをしたことがあるのだが、今は親との仲は良好。
- アダム・トラスク(レイモンド・マッセイ) : アダムは人類の祖。キャルとアロンの父。かつては東部で農場を営んでいたが、1年前に東部からサリナスへと移住し、レタスの栽培と冷凍輸送を考え始める。敬虔なクリスチャンで、キャルが問題を起こしたときには聖書を取り出し、聖書の一節から教えを説く。
- ケイト(ジョー・ヴァン・フリート) : モントレーであいまい宿(いかがわしい酒場)を営んでいる。
- アロン・トラスク(リチャード・ダヴァロス) : アロンは出エジプト記のモーセの兄。アダムの長男でキャルの双子の兄。アダムに従順で礼儀正しい性格から、アダムの期待を一身に受けている。

《主演者》

- ジェイムズ・ディーン(キャル) : 1931-1955(24歳)不世出の青春スター。ワーナーでわずか1年4か月の俳優生活で、3作品「エデンの東」「理由なき反抗」「ジャイアンツ」を撮ったあと、1955年9月30日、自動車(ポルシェ)事故で死去。「僕は待たれている…」と生きていれば今年87歳。インディアナ州生まれ。4歳で母に死別。ニューヨーク、アクターズ・スタジオに学ぶ。母の愛を求め、ナタリー・ウッド(「理由なき反抗」で共演)、ピア・アンジェリ(本命)と恋愛。彼女が歌手ヴィック・ダモンと結婚して破局。映画評論家小森和子さんが彼のファンで、毎年命日には、ケーキを持ってワーナー宣伝部を訪問した。
- 彼の魅力 : 少年のような危うさと、はかなさ。愛を求める一途さ。あのまなざしと鼻にかかった甘い声。映画冒頭、母を待っていて、通り過ぎる母の顔を見上げるあの瞳＝全身で愛を求める純粋さ。父を求め、母を求め、恋人を求めるあのひたむきな瞳を持ったスターは後にも先にも彼以外にいない。

- ジュリー・ハリス(アブラ) : 1925-2013(87歳)「エデンの東」出演時は30歳、24歳のジェイムズ・ディーンより6歳年上。)

《字幕翻訳》

- 劇場訳は高瀬鎮夫氏。戸田奈津子さんがビデオ訳、数年後に劇場再公開時に、ビデオ訳に不満で、全編やり直した。(プロ魂！)

上映後

《映画の見どころ》

- ジェイムズ・ディーンの天性の演技力 : 豆を栽培してお金を儲け、父の誕生日に贈るも、拒否された時、「わわわあ」泣きながら出ていくシーンは、脚本になかった彼のアドリブ。⇒この映画に
- テーマソングの美しさ : 映画の始め、遊園地のシーン、エンディングにも。
- この映画のテーマ : 「善と悪」
 - 「善」とは何か? 「悪」とは何か?
「善」は常に正しいのか? 本当に人を幸せにできるのか?
「悪」は常に間違っているのか? 本当に人を不幸にするだけなのか?
 - 「善」を象徴する父親アダム:
 - * (保安官サム)彼ほど親切で正しい人はいない。善人。
 - * (元妻ケイト)この世で一番の聖人。清さで私を縛りつけようとした。
 - * 家庭礼拝: キャルが、アロンとアブラの氷倉庫での愛に嫉妬して、氷を外に出した罪をいさめるため。「幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、その霊に欺きのない人は。」(詩篇 32:1-8)
 - * その謹厳さと善良さのゆえに、息子を受け入れられない父と、父の愛を求めて得られない息子の関係は、「カラーパープル」の牧師と酒場のシンガーになった娘シャギーの関係に似ている。
 - もう一人、その自慢の息子アロン:
 - * (恋人アブラ)「彼は口先と頭だけで愛を語る。」「アロンの語る愛は清く正しい」
 - * 彼の父や恋人に対する愛は、理想化された“純粋培養の愛”。全てに潔癖で、アブラのうちに理想的な女性像を求める一方、ひねくれて悪さばかりする弟を軽蔑し、憎む彼は、現実というものの厳しさと醜さを直視できない。

*そんな彼はルカ伝 15 章の“放蕩息子”の兄。

●「悪」を象徴する双子の弟キヤル:

*父にことごとく反抗する。ひねくれた性格。(聖書の節を読むなどと言われても読む。)しかし彼の悪さは、“孤独”の裏返し。父の関心と愛を得たいばかりに、わざと悪者を演じては父の注目を得たい“悲しい悪”。

●両者の「仲保者」アブラ:

その彼と心を通わせ、最後に父と彼の和解のためのとりなしをする。

*アロンの前では、自分が悪く思えて頭が混乱する。

*彼が愛しているのは、理想化された、本当の自分ではない女性。

●この映画の隠れた真のテーマは「愛」。そして「善と悪」の関わりのカギ:

●愛は至上。だが、受け入れてもらえない愛ほどつらく、悲しく、心が痛むものはない。そして、和解し、受け入れられた愛ほど美しいものはない。

●この「善と悪」そして「報いられない愛」のテーマは、ラストシーンでぶつかり合い、頂点に達し、砕け、静かな終焉を迎える。

*アブラとの婚約を父に告げ、「聖く美しい贈り物だ」と喜ばれるアロン。

*父の損害の5,000ドルを取り返してあげようと豆栽培で儲けたお金を贈ったのに、「戦争で儲けた金(汚れた金)は絶対に受け取れない」と拒まれるキヤル。「私に喜ばれたかったら、善人として一生を送れ。」

*キヤル「僕は心のねじれたひねくれ者。パパは善人だ。常に正しい。僕ら(母とキヤル)は赦される側で、パパはいつも自分の正しさを押し付けようとする。僕を嫌いなのは母と似ているからだ。もうどんな愛も要らない。愛なんて損するだけだ。」(これほど悲しい言葉があるだろうか?)

●「善と悪」の問題は、「愛」を抜きにしては、どんなに正しさを説いても不毛。父アロンの○言うこと、行うことは全て正しかったが、彼は何よりも大事なことを忘れていた。それは、×正しくあることのできない人の不安と、劣等感と、寂しさを、そのまま受け入れようとする「愛」の欠如だった。

●聖書の語る「義」と「善」は、それ自体は神様のご性質でもあり、すばらしく、大切なもの。だが、人がそれに生きようとするとき、無意識のうちに、弱い人、清く正しく歩めない人を拒絶する壁を造ってしまう。それは、いつも外側の己を飾ろうとする「偽善」と、自分さえ正しければという独りよがりの「独善」と隣り合わせており、他者を正しきで裁く「律法主義」と紙一重なのだ。なぜだろう？それは、人間の義と善は、自己中心の「罪」の上に打ち建てられたものだから

だ。主にある兄弟姉妹に対して、まだ未信者の方々に対して、愛する伴侶や家族に対して、私はどうか？ 私の教会はどうか？

●父は、最後にその誤りに気づく。その誤りに気づかせたのは、アブラ。彼女は死にゆくキヤルの父に涙ながらに訴える。「愛されないことほどつらいことはない。愛されないと心がねじける。あなたは彼に愛を与えず、愛を求めなかった。いま彼に愛を見せてください。彼の心の鎖を解かなければ、彼は一生罪びとです。何かを求めてあげてください。彼はあなたの愛を悟ります。」ある人が、この映画の隠れた主人公はアブラだと言った。人間の不完全さと弱さを知り、自らも愛されない不安と傷を持ちながら、いつもキヤルに寄り添い、受け止め、最後には父へのとりなしをした彼女。そのような、母マリヤのような包容力のある存在が、魂の救済と回復には絶対に必要。

●アダムが最初に最後にキヤルに求めたのは、「あの看護師を代えてくれ」。キヤルはその前に「出てけ！」とその無神経な看護師にどなり、もう表情も出せないアロンの顔に満足の笑みが浮かぶ。この求めは重要。父は“善人”の衣を脱いで、人間的不平不満を息子の前で初めて見せた。“共同の敵”を排除することで、二人の心が通った。そして「お前が私の面倒を見てくれ」と。(最後の父の言葉は聞こえず、キヤルからアブラへの伝言で。)高みにいた父が、それまで求めても得られなかったキヤルのもとに、降りてきた瞬間だ。

●人間の父の愛には限界がある。自分の立場と、己の義と善に固執するあまり、自分に対して寄せられた愛の純粋さ、ひたむきさ、払った犠牲の大きさ、それを拒んだときの取り返しえない損失の大きさに、気づくゆとりを持たない。だが、「善にして義」なる神の愛は、へりくだって相手に「求め」、相手を“悪”のままに「受容」するときに限りなく美しい光を放って完成する。それは、神のみ子イエス・キリストの十字架に表された。父がキヤルの心の中に下りてきたように、罪なきお方が、天の栄光の座から下られ、十字架の上で私たちの全ての罪を負われた。神の義が、神の愛によって満たされ、人は再び神のもとに帰ることを許されたのだ。もはや人は楽園を去り、「エデンの東」に追いやられることはない。キヤルが父の部屋にとどまることができたように、私たちがまた、主の十字架を通して、今置かれた日常生活の中で、神と共なる愛と喜びの「エデンの園」の中に永遠に憩うことができるのだ。

●「聖書で読み解く映画」いいですね。ではまた、ハレルヤハレルヤハレルヤ！